

アンナ・L・ストロング再発見

「中国人民の友」のいら立ち

同調米人同士の確執も

もっとも二十世紀的な出来事であつた社会主義革命がいまや潰

(つぶ)れつつあるとき、「革命」の不毛性を鋭く説いていたアンナ・アレント女史の警告を思う半面、なぜ「革命」がそれほど多くの人々、とくに知識人を魅惑したのかを考えざるを得ない。

「革命」への熱狂は、現代アメリカ社会においても、たしかに存在した。そうした雰囲気のおかげで、多くのアメリカ知識人が中国の革命に賭(か)けていた。エドガー・スノー、ニム・ウェールズ、アグネス・スメドレー、ルウィ・アレキ、ハロルド・アイザックスの名前がアンナ・ルイス・ストロングとともにすぐに浮かんでくる。「革命」に賭けたのではないまでも、「中国」に賭けた人々には、オーウェン・ラティモア、パール・バック、ジョン・R・フェアバンク、そしてステイルウエル將軍とその影響下の人々などがいた。

さらに太平洋問題調査会(I.P.R.)や石垣綾子女史らの活躍もあ

中嶋 嶺雄

なかじま・みねお 一九三六年、松本市生まれ。東大大学院修了。九二年秋から、カリフォルニア大学大学院客員教授を務めた。専門は国際関係論・現代中国学・アジア地域研究。著書に『現代中国論』『北京烈烈』『国際関係論』など。



東京外語大教授

つたし、遠景としてはゾルゲ尾崎秀実事件や昨今話題の野坂参三氏の滞米などもあったといえよう。このような状況が五〇年代初頭の冷戦期に乗じたマッカーシズムの「赤狩り」旋風をもたらした、それとの関連でカール・ウィットフォールゲル証言やのちの都留重人証言、そしてハーバート・ノーマンの自殺とその謎(なぜ)などが

生じていて、現代史の重要なことをかたचितづけている。そうしたなかで、アンナ・ルイス・ストロング女史は中国共産党の同調者という点で最も際立っていた。延安訪問後に書いた『中国人が中国を征服する』(一九四九年)は、スノーの『中国の赤い星』に次ぐ中国革命物語として読まれたし、革命後の『人民公社は拡がり深まる』(一九五九年)は、毛沢東型社会主義建設の解説書として流布し、文化大革命期につづいた『中国からの手紙』(一九六二―七〇)は、当時の中国指導者の意向を忠実に反映したものと受け止められてきた。だからこそ、二度とアメリカに戻らなかつた彼女が一九七〇年の満八十四歳で北京で死去したときには、「進歩的なアメリカの作家にして中国人民の友人」として手厚く葬られたのであった。つまりストロング女史こそ、終生、中国当局に大切にされたアメリカ知識人の典型なのだ。私はこれまで考えてきてい

そのような私の見方が修正を迫られ、彼女が病床にあつた最晩年にはアメリカへの帰国を望んでも果たされず、肉親のジョン・ストロングに会いたくても中国当局は彼の入国を許さず、怒りという立ちのうちに生涯を閉じたことなどを知つたのは、私がカリフォルニア大学サンディエゴ校の大学院で教鞭(きょうべん)をこるようになってからであった。同大先輩

補佐を勤める政治思想史のトレーシー・ストロング教授がストロング女史の弟の孫で、ヘリーヌ・ケイサー夫人とアンナ・ルイス・ストロングの克明な伝記『魂に宿る誠(Right Heart Soul)』(一九八三年)を著しており、同教授と語り合う機会を得たからである。

もとより、ストロング女史は「世界の革命、とくにアメリカ合衆国の革命」に貢献する目的を生涯貫こうとした。それゆえに彼女はアメリカ共産党へ入党を希望したことがあつたが、同党は彼女を拒んでいる。その理由については、彼女ほどのラジカルがマッカーシズムの時期を難なく過ごせたこととともに問題として残るが、一つには彼女の若き日のトロツキーとの交友関係があつたといえよう。ストロング女史はロシア革命直後、当時のアメリカの大新聞ハースト社の通信員としてモスクワへ派遣された。彼女はたちまち革命同調者となり、その職を失うが、トロツキーと知り合つて一時は彼の英語教師にもなつた。トロツキーがスターリンに追放され、「裏切られた革命」を書いた頃は、彼女もトロツキーを批判して

いるけれど、ジャーナリストとしての彼女の最初の本『歴史の最初の時—ロシアの新生活の二年』(一九二四年)には、トロツキーが序文を寄っている。やがてソ連に失望し、またモスクワを追われる身となつたストロング女史は、今度は中国で毛沢東、周恩來ら中国共産党の指導者と親しくなつた。「帝国主義は振り子の虎(とら)である」との毛沢東発言を引き出したのも彼女である。にもかかわらず彼女は孤独であり、スノー夫妻やスメドレー女史らともじっくりいかなかつたようである。これらの人々は手を取り合つて中国共産党を支援したかのように思われがちであるが、たとえばラティモアの回想記にあるスメドレー女史への冷淡な言葉にも示されるように、決してそう

ではなかつた。競争意識や対抗心、それに様々な利害関係もあつたのである。



安永 落子

今年(一九九三年)は、寺山修司没後十年というので、寺山ブームがつづいてい

一枚の写真
数年後、西域へ出かけることがあつた。荷のなかに、寺山さんの『地球空洞説』一世を入れた。冒頭に上海を舞台とする一章があつたからだ。旅程の第一

日めは上海租界を歩くことであつた。上海では寺山さんとは全く無縁の街の旧蹟(きゅうせき)を巡(たづ)ねた。しかし、寺山さんからは、すぐには納得できない言葉であつた。翌年五月四日、寺山さんは逝つた。一年早い、と口惜(くし)しかつた。残つた写真の寺山さんは紺のセーターを着ていて、精悍(せいけん)で、無にいたる入口(いりぐち)が在る」といふ。レイモンド・バーナードの言葉を冠して言う寺山さんの「新世界」への誘いがわかるような気がした。言葉は、時に、現実を一步も二歩も先取りするからだ。(歌人)